而して第一種の地圖は四十萬分の一の割合にて作製され、各地區の地質學的狀態の梗概を示すを以て其目的とし、第二種の地圖は二十萬分の一の割合にて各地區の小部分の地質を示すを以て其目的とした。此種の地圖に在つては、地質學上の諸種の岩層は各異なつた色彩にて表示され、且つ經濟上注意するに足るべき富源材料の所在地は便宜符號に依つて之を明示してゐる。

次に地味的調査も既に完成し、各府縣に就いて各十五萬分の一の割合の地圖を作製した。尚此等の組織的事業の外、經濟上の見地より見て重要なる或特別の地方、例へば石炭石油其他の諸鑛物を產出する土地の地質的調査も亦完成した。次に、北海道の地質的調査は明治二十一年以來神保小虎博士、其主任地質學者として之を行つた。而して此調査の目的は實に北海道全部一般の探檢と鑛物的富源の探索とに在つたことは言ふまでもない。明治二十四年神保博士は其主任を辭したが、尚明治二十九年に至るまで該事業を繼續し遂に完成の運びに至つた。

我が國地質學界が特に誇とすべき事業は實に前記和田維四郎博士が多年苦心を嘗めつゝ敢行した日本產鑛物の蒐集であつて、之を他の之と同種の蒐集事業と比較するに最も優良なるものと稱せられる。又、博士の著『日本の鑛物』は明治三十七年の出版に係かるものであるが、實に此問題に關する本邦に於ける標準的著作となつてゐる。因に博士は昨年此名著を再版して同博士の知人間に頒布されたといふことである。

尚、此方面に關する學會は今日、東京地質協會及び東京地理學協會の二箇ある。前者は東京帝國大學理科大學の地質學教室に事務所を置き、月刊雜誌を出版し東京地質學協會雜誌と名けてゐる。又、後者は理學に關する總ての學會中資金最も潤澤なるもので、特設建築物を有し、且つ皇族、貴族の保護を受けてゐる。而して月刊『地理學雜誌』は實に此會の機關雜誌である。

四　人類學

我が國に初めて人類學の研究の基礎を据ゑた者は、實に前にも述べたる

モールス教授である。教授が生物學以外の數種の學科に興味を有し、聰敏なる觀察眼を有したことは前節に詳述したのであるが、彼が日本に赴任せる際、當時僅に開けてゐた京濱鐵道に搭乘じて横濱より東京に入る途すがら、偶、汽車の窓から、今の大森停車場附近の貝塚を見付け、着任早々屢、彼地に至り、歴史以前の貝塚の一部分なるべしと認定し、故外山博士故矢田部博士等に勸說して遂に貝塚の發掘を開始するに至つた。是より日本先住民の研究となり、アイヌやコロボックルの議論一時囂然として起り、モールス氏も精到なる研究を盡し、其結果を今日の理科大學紀要の前身にしてモールスの初めて唱へ出した『東京大學理科會粹』に掲載した。然るに、當時石川千代松博士等と共に動物學の學生であつた故理學博士坪井正五郎氏はモールス氏の非常なる感化を受け、學生時代より歴史以前の遺物の研究を以て畢生の目的と爲し、其後理科大學教授となり、遂に東京帝國大學に人類學及び古物學の研究科目を設立するに至つた。實に我が國現時の人類學は故坪井博士に依つて其基礎を確立するを得たと言はねばならない。故坪井教

授及び其門下は心を戮せて遺物の採集に努力し、明治三十三年の調査に據れば、其採集した場所は實に三千四百六十八箇所の多きに達し、就中、其三百二十八箇所は貝塚である。現に東京理科大學人類學教室に備付けられてゐる地圖は實に教授及び其門下生の苦心と熱誠とを事實に物語つてゐるの感がある。而して彼等の研究は單に日本古物の搜索詮議にのみ止まらず、日本を初め諸隣國に於ける野蠻人種及び原始種族の研究にまでも及んでゐる。例へば北海道のアイヌ人種、臺灣の土蕃、支那四川省の苗族等は、東京醫科大學の小金井良精博士や、右の坪井教授及び其門下生鳥居龍藏氏等に依つて各綿密なる研究が遂げられたのである。

故坪井博士は一方に於て大學に人類學を講義すると同時に、廣く一般に向つて其研究の結果を發表せんが爲めに、早くより東京人類學會を組織し、其機關雜誌として月刊『人類學雜誌』を發行し以て今日に及んでゐる。

第五章　哲學及精神科學

一　哲學の發達

西洋學術が初めて我が國に入り來たるに際して先づ最初に傳へられたるものは外部に關すること、換言すれば、國家の健全と人身の健全とを維持するに必要なる兵學と醫學とであることは第二篇に於て既に明かに會得することが出來たと思ふ。明治の當初に於ても大體に於て此傾向を採り、軈て、兵學と伴つて政治及び法律を學び、又醫學と伴つて理化學を學んだのである。是れ漸く外部を整へて、次第に內部を整へんとする傾向と見ることが出來る。斯くして外界の研究より漸次內界の研究に推移し來たるに從つて、彼邦の哲學竝に所謂精神科學を輸入するに至つたのである。勿論斯く言つても、必ずしも事實精確に此順序若しくは年次を辿つたものではなく、外界研究を主とする諸科學と內界研究を主とする哲學及び精神科學とが兩々相竝んで盛に輸入されたことは事實であるが、當初に於ては、年次

に先後のあつたことは爭ふべからざる所である。若し、我が國に諸般の文物を輸入するの媒介者となつた米國が當時今一層哲學を盛に研究してゐたならば、我が國に彼の國の哲學の輸入するのも今一層早かつたことであらう。然るに、米國に於ては、實際生活が主であり、寧ろ眼前の實利實用といふ思想が一般を支配してゐた時代であつたから、哲學の如きも多くは宗教に合されて研究されてゐた爲めに、哲學らしき思想の我が國に輸入したのも從つて他の數物學、博物學に比して稍、後れた氣味のあつたことは止むを得ざる次第である。米國より稍、哲學に關係ある學問の輸入したのは卽ち維新前後より我が國にかのウェーランドの倫理書が行はれたのを以て其嚆矢とする。（此書は大井謙吉氏の譯、又阿部泰藏氏の譯もある。）。ウェーランドは當時三十年間ブラウン大學の總長として米國學界に信用あり、其倫理書は經濟書と共に廣く彼國に行はれ、我が國にも亦夙に此二書が輸入されたのである。殊に有名なる話は前にも述べた故福澤諭吉氏が明治元年五月十五日上野戰爭の當日、砲聲を聞きつゝ當時新舶來に係かる彼の經濟書を講じたといふこ

とである。

斯く米人ウェーランドの倫理書に依つて序幕を開かれたとも言つてよいの哲學思想の影響を受け、後、漸次佛國系統の感化を蒙りて飽く迄も實證的、功利的のものであり、偏に社會國家の爲め、實際生活の爲めといふことを狙ひ、實利、實學、自由、民主、平等等を合言葉としてゐたことは爭ふべからざる事實であつた。ミル、ベンザム、スペンサー、モンテスキュー、ルーソー等の思想が盛に我が國に傳へられたのも皆此時代のことである。而も當時に在つては、寧ろ彼等の著書中、經濟、社會、政治等に關するものが最も廣く讀まれ、純粹の哲學に關するものは其割合に讀まれなかつた。それは兎に角、當時の哲學は主として英米及び佛國を祖述してゐたことは事實である。

明治六年、開成學校に於てサンマー氏が論理學を講じたのは、凡そ學校にて論理學が教授された初めであらう。教科書としてはファウラーの演繹法及びミルの論理學が使用された。翌明治七年サイル氏は哲學（哲學の名は故西周氏が初めて命じたものといふ。當時又理學とも稱せられた。）の名を以て心理學を講義し、ホプキンスの人論及びヘーヴンの心理學を以て教科書と爲し、史學には又ギゾーの文明史を交へてゐた。而して、當時慶應義塾及び其他の諸學校に於ては英語の譯讀としては概ね此文明史を以て最上級に課してゐた。然るに明治九年、十年頃に至り、ギゾーの文明史漸く振はず、之に代つて、英のバックルの文明史が我が學界に專ら行はれ、之に倣つて日本の文明を論じた人もあつた。是より先、ミシガン大學に遊學してゐた故文學博士外山正一氏は明治九年學業を卒へて歸朝し、直に開成學校の教授に擧げられ、次いで東京大學文學部教授として哲學其他關係學科を教授したのが、卽ち邦人にして初めて哲學教授に從事した嚆矢と言つて差支ない（慶應義塾の故福澤氏は素よりウエーランドの倫理學を講義してゐたが、哲學教授としては勿論外山氏を邦人の初めと言はねばならぬと思ふ。）。外山氏が當時大學にて教科書として使用したものはジェヴォンスの論理學、ベーンの心理學、スペンサーの生物學、心理學、社會學等であつた。而して、スペンサーが初めて我が學界に紹介されたのは實に此時である。當時フィスクの宇宙哲學概論は學生間にスペンサーを紹介するに與

つて力あつた。之と伴つて、一方に於てはベンザムの功利說行はれ、故陸奥宗光伯の如きは獄中に在つて之を飜譯し、『利學正宗』と題して出版した。ミルの『利學』(故西周氏飜譯)が飜譯されたのも此頃のことである。尙、此外にモンテスキューの『萬法精理』を英譯より重譯する者もあつたが、別に純佛國派とも稱すべき者もあつて、專らルーソーの民約說を祖述し、故中江兆民氏譯の『民約譯解』の如き、早くも世に現はれたのである。

當時我が哲學界に最も大なる影響を與へた者は、かの明治十年東京大學生物學教授として米國よりモールス氏が來朝して盛に英のダーウィン及びハックスレーの進化論を紹介し又主張したことである。彼が唱道した、人類は猿猴類より進化し來つたといふ說は當時我が幼稚なる學界竝に一般思想界を喫驚せしめたことは夥しかつた。彼は又巧に黑板上に圖解し、學の生のみならず、一般人に向つて盛に講演し、聽衆を感化し、一時世を風靡する概があつたことは前にも述べた通りである。之と同時にスペンサーの進化論非常に世に行はれ、社會に關する一切の現象は皆此社會學に依つて解

釋せんとするの風があつた。當時、バーヴァード大學より、かの有名なるフノロサ氏來朝して(明治十一年八月のこと)モールス氏と共に頻りに講演し、スペンサーの社會學に依つて宗教を論じた。斯くの如く當時の我が哲學界はスペンサー一點張ともいふべき有樣で、故福澤氏が『時事小言』を著してガルトンの遺傳論に據つたのも實は其影響に外ならなかつた。キャピテン・クックが世界一周の途次、我が國に立寄り、雄辯を揮つてモールスを攻擊し、進んでダーウィン、スペンサーの學說を批難したのは實に此勢を飜さんと試みたものと見てよい。然し當時我が學界に於てはスペンサーの學說を只管妄信したのではなく、既に之を批評し得るの程度に達してゐたのであるから、クックの雄辯も却つて其淺薄なるを怪しまれた位であつた。

斯くの如く明治十三四年頃までは殊にスペンサー一點張であつたが、此頃になつて漸く我が哲學界の一方に獨逸哲學が紹介され輸入され始め、漸次英を離れて獨に向はんとするに至つた。恰も此過渡期に身を置いたのが、前記のフェノロサ氏である。彼は一方に於て故外山氏に和して盛に英國

流の哲學、就中、ミル、スペンサーを講述すると同時に、他方に於てカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルを講述し、英獨哲學の綜合を以て其抱負と爲したのである。フェノロサに先立つて、クーバー氏は大學に於いてカントの批判論を講じたのが卽ち我が哲學界に獨逸哲學の紹介された嚆矢である。然るに、フェノロサ氏も明治十三四年より、哲學を擔任し、デカルトよりヘーゲルに至るの講義を試み、參考書としてシュウェーグラーの哲學史を用ひ、而して學生の中にはボーヴェンの近世哲學に依つて其意味を解するに努めた者も多かつた。又、氏はウァルレスのヘーゲル論理をも講じたのであるが、是れ實に、我が哲學界が獨逸に向ふ轉機を劃したものである。當時之と竝んで故外山氏はスペンサーを主として、其原理論を辯護する傾があつたが、カントの批判を讀み、ヘーゲルの辨證論を窺つた當時の學生には既にスペンサーの不可知論を頗る物足らず感じ、形而上學に就いては勢之より遠ざかり、カント以後ヘーゲルに重きを置くこととなつた。フェノロサ氏の說く所は頗る疎略で、恰も隔靴搔痒の感があつたが、彼の能辯多才は能く學生の意氣に投じ、其

感化する所も頗る大なるものがあつた。氏が就職當時の我が大學は其制度、法、理、文の三科に分れ、文科中には政治經濟及び哲學を含んでゐた。而して氏は獨り哲學科の教授たるのみならず、政治經濟に就いても教授し、三方面に向つて重要なる地位を占めてゐた。氏は政治經濟に關しては專ら英米の學說に準據して之を教授した。今日の井上、有賀、高田、三宅、坪井、和田垣、都筑、穗積、阪谷等の諸博士は皆其教授を受けたのである。斯くて氏は明治十九年七月に至る迄前後八箇年在職し、辭職後は文部省に轉任し、遂に美術學校教授となり、我が國美術界の爲めに尠からざる功績を擧げ、後、歸國して明治四十一年（一九〇八年）死んだことは世人の知る所である。

明治十八九年に米人ノックス氏は暫く哲學講座を擔當したが、續いて明治二十年更に獨逸よりブッセ氏來朝して之に代り、共にロッツェの哲學を奉じ、一方又當時の牧師中にもロッツェに據るものがあつたから、ロッツェの名聲漸く當時の我が哲學界に重んぜらるゝに至つた。是れ初めて明かに獨逸を師宗とするに至つたことを示すものである。ブッセは一八六二年ブウンシュヴィクに生

れ後、ライプチッヒ、インスブルッグ、伯林の諸大學に學び、其學主としてロッツェ及び後にはユリウス・ベルゲマンの感化を受け明治二十年我が東京帝國大學哲學教師として來朝し同年一月より倫理學、美學、論理學、哲學入門の各科を講じ、我が國哲學の進歩に貢獻する所甚だ大なるものがあつた。即ち、彼が哲學の歴史的研究を奬勵したのは我が國の哲學研究に一轉機を與へたものと言はれてゐる。ブッセ氏在職五年の後即ち明治二十五年（一八九二年）十一月任滿ちて故國に歸り、一八九六年ロストック市大學の正教授に聘され、一八九八年ケーニヒスベルグ大學に轉じ、更に一九〇四年以降ハッレなるミンスターに教授したが遂に一九〇七年我が明治四十年九月、四十六歳を以て死去した。

ブッセ氏來朝當時は未だ哲學の眞義も明かに理解されず、哲學史の知識も一般には尙甚だしく幼稚たるを免れなかつたが、氏以後の我が哲學界は確に其面目を一新したことは爭はれない。當時哲學の名頻に流行し、『洒落哲學』や『色情哲學』や『處世哲學、一名、世渡りの綱』や、『變哲學』などと題する書が

世間に流布し、之に對して杉浦天臺道士が『哲學こなし』を著して『哲學の書が兀々として固黑しき事カリン糖を食ふが如し』と大喝して哲學を打潰さんとしたのも皆是れ哲學の意義が眞に一般に了解されなかつた證據に外ならない。西村茂樹、鳥尾小彌太二氏の間に行はれた哲學の意義及び範圍に關する論諍を初めとして三宅雄二郎氏の哲學範圍論の現はれたのも此頃のことである。

是より先、明治十七年一月、當時新進少壯の學士連、井上圓了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄二郎、棚橋一郎等の諸氏主唱者となり、次いで今は故人となつた加藤弘之、西周、西村茂樹、外山正一等の諸氏の補佐の下に哲學會が組織され、爾て雜誌も發刊され、『哲學雜誌』として以て今日に及んでゐる。今其趣旨を見るに、左の如き文言がある。

請ふ、試に歐洲文明の由て起る所以を見るべし。其文明の國力と共に近世に隆なりしは唯、政治、法律、理學、工藝の進歩に因るにあらず、其原理原則を論究する哲學の振起せしに因るや余が辯を待たずして明かなり。已に今日

にありては其他の學者互に相競ふて哲理を講究し、其得る所之を世間に應用して其文明を進め其社會を益する實に計るべからざるものあり。嗚呼亦盛なりと言ふべし。顧みて我邦の事情を察するに啻に之を講究する人なきのみならず殆ど其學の何たるを知るものなく偶々其何たるを知るものあるも徒に之を目して世間無益の學なりと稱し復之を顧みざるもの多し。夫れ是の如し焉んぞ能く國家の文明を振起するを得んや。殊に我東洋にありては西洋人の未だ研究せざる從來固有の哲學あつて其中に亦自ら一種の新見あつて存するを見る。若し今日之を我邦に研究して西洋の哲學に比較對照し他日其二者の長ずる所を取りて一派の新哲學を組織するに至らば獨り余輩のみならず日本全國の榮譽なり。學者豈猶豫因循之を弗講に措くべけんや(云々)

以て當年に於ける我が少壯哲學者の意氣と我が哲學研究家の抱負とを察するを得るであらう。

ブッセ氏來朝以後獨逸哲學の研究盛に行はれ、中島力造氏(エーベル大學神學科出身)はカントの物如論の研究を以て學位論文とし、更にヘーゲルの辨證法を講演し、カ

ントの批判哲學に關する論文を發表した。それと同時に故大西祝氏は頻りに佛教の歴史的研究の必要を唱へ、又新に獨逸より歸朝した現教授井上哲次郎氏は大學に東洋哲學史、比較宗教學の講座を創設した。然るに當時井上氏はブッセ氏の師宗とし、我が國に大に持囃されたヒッツェの哲學をば少しも賞讃せず、爾來、ロッツェの名聲次第に我が哲學界より遠ざかり、ライプチッヒ大學教授ヴントの名最も盛に讃へられ、漸く之を第一位に置くやうになり、又哲學史に關してはハイデルベルヒ大學教授故クノー・フィッシャーを重んずるに至つた。ロッツェ派のブッセ氏歸國の後、明治二十六年六月ケーベル氏來朝し、益獨逸哲學の解説に盡力し、數年前まで其職に在り、前後二十餘年我が哲學界の爲めに貢獻する所頗る大なるものがあつた。氏は一八四八年露國ニジニ・ノブゴロッドに生れ、初めモスコーの音樂學校に入り、專らピアノを修め、それより獨逸に遊び、イェナ及びハイデルベルヒに學び、殊にクノー・フィッシャーに就き哲學を修め、明治二十六年西洋哲學教師として我が國に來朝したのである。氏の態度は公平穩健であつたが、幾分かショーペンハウァーに傾き、シ

ーペンハウァーに關する研究もあり、明治二十八年三月の哲學會に於て『シ』ーペンハウァー氏の意志は無知的にあらず』との題下に講演を試みた。殊に氏の人格の高潔にして如何にも純樸なる點は非常に重味を增し、好感化を學徒に與へたことは事實である。此間、我が哲學界には井上哲次郎氏の宗教と教育との衝突と題する論文現はれ基督教界を震動せしめたのを初めとして、故加藤弘之氏の『强者の權利の競爭及其發達』が獨墺佛の學界に多大の反響あつたことや、一般に倫理、宗教、教育問題が盛に論究されたことや、大學に於て頻りにカントの研究を試みたことや、井上哲次郎氏の有名なる『現象卽實在論』と題する講演があつたことや、故加藤弘之氏が其著書に對する內外の評論に一々答辯を與へたことや、外山井上二氏の『神代の女性』觀の論爭や、純正哲學に對する木村鷹太郎、故高山林次郎、松本文三郎三氏の論爭などがあつた。是等は何れも明治二十七八年より三十年頃までのことである。

當時ヴントの名聲は依然として高かつたが、明治三十年以來、伯林大學教授故パウルゼンの名が隆々として高まり來たり、學徒多く之に據り、哲學の

大體に關し先づ之を引用するの姿を呈した。之と共にストラスブルグ大學教授故ヴィンデルバントの哲學史、ウルツブルグ大學教授故キュルペの哲學概論等も多く參考さるゝやうになり又、一方英國のヘーゲルと稱せらるるグリーンも大に我が學界の注意を喚起し、其自我實現說は倫理學界に今尙行はれてゐる有樣である。又、一方、哲學史の研究は當時の學生波多野精一氏に依つて其必要を唱へられ（故大西祝氏はそれ以前に唱道してゐた）中島力造氏の『列傳體西洋哲學史』を先驅として、藤井健次郎氏、蟹江義丸氏、桑木嚴翼氏、波多野精一氏等の西洋哲學に關する著譯續々現はれ、又、故中江兆氏の『一年有半』『續一年有半』等も歡迎され、京都には旣に明治三十三年に於て京都哲學會が起つた。其他哲學關係の諸學科夫々非常の發展を爲し心理學、倫理學、社會學教育學等各種の研究會も起り、宗教上の議論も盛で、殊に村上專精氏の『佛教統一論』が大問題を釀す等、當時の思想は一般に實際的傾向を採つたことは著しき特色であると言はねばならぬ。此間幾分か思想界に波瀾を生ぜしめたのはニーチェの個人主義、本能滿足主義、超人主義であつた。ニーチェに就ては本

國獨逸に於ても盛に論議されたが、我が國に於ても少からず人の頭腦を惱ましし甲論乙駁一時論壇に火花を點じたが、是は寧ろ文壇乃至一般思想界の消息であつて、純然たる哲學研究の方面に於ては依然としてパウルゼン及びグリーンに據ることが多かつたのである(第一章に詳述したチエに關しては)。

日露戰爭當時、大塚保治氏が發起して時局學術講談會を開いたのは學者の社會的活動として頗る注目されたが、戰後、益々哲學は社會に接近するに至り、井上哲次郎氏は當時宗教界に續出した豫言者に對する批評を含んだ『戰後に於ける我が國の宗教如何』を論じ、又大塚氏は家族主義と個人主義、國家主義と世界主義とを如何に調和せしむべきかに關する『日本文明の將來』なる講演を試み、又、儒教の復興運動も盛に行はれ、明治三十九年よりは京都大學に文科大學開設され、哲學教授の擔任者としては桑木、朝永、西田の諸氏があつたが、其後、桑木氏はケーベル氏歸國の後を承けて、東京大學に轉じて來た。尙、戰後文壇に自然主義の論爭行はれたに對して、哲學界には英米の學界を騷がしつゝあつたプラグマティズムが輸入し來たり、故元良氏も大學の

講義中に之に論及し、紀平正美氏は既に明治三十八年に於て此新思想に論評を加へ、桑木氏はプラグマティズムに就いて講演し、田中喜一氏と桑木氏との間に數次論爭が行はれたが、是は一方金子馬治氏と故綱島榮一郎氏との宗教的眞理に關する論爭と共に當時確に最も眞面目なる二大論爭であつた。其後四十一年に於ける吉田靜致氏對故北澤定吉氏(又紀平氏)の人格的唯心論に關する論爭も頗る目醒しきものがあつた。同じく、明治四十一年更にベルグソンが紹介されたが、當時數年間は殆ど其名が一般に普及せずに仕舞ひ、漸く今より三四年前に至つて獨逸のオイッケンの名と共に俄かに流行し出した。此間、波多野氏の『スピノーザの研究』西田氏の『善の研究』三宅氏の『宇宙』は特に學者の注意を惹き、木村氏のプラトーン全集の飜譯及び姉崎正治氏のショーペンハウァーの主著『意志と現識としての世界』の飜譯等の完成を見た。斯くして明治年間に於て我が國の哲學研究の基礎は漸く確立したのである。

二　精神科學の發達

心理學　明治七年サイル氏が哲學の名を以て開成學校に於て心理學を講じ、ホプキンスの人論及びヘーヴンの心理學を教科書として使用したのが我が國に於て心理學の講ぜられた初めである。其後ヘーヴンの心理學が邦譯されたが、明治十年頃よりベーンの心理學が一般に行はれ、前にも述べた如く、故外山氏がベーンの心理學を教科書として心理學の講義を開いたのである。之と同時にカーペンター、モーズレー等の心理書が參考に供せられ、明治十六年頃より英のサリーが廣く行はれたのである。而して大體哲學の場合と同じく明治二十年頃までは主として英米の心理學が學界に廣く讀まれたことは爭はれない。ヴントの如きは今日非常に重きを爲し殆ど唯一典據となつてゐるかの觀があるが、當時は未だ我が學界に知られなかつた。是れ獨り我が國のみならず、彼が本國に於ても同樣であつた。勿論、心理學はフェヒナーに至つて一變したとはいふものの、精神物理學なる

ものは種々の疑問を以て迎へられ、ヴントが愈〻生理學に基礎を置いて說を爲した後に於ても、例へばツェラーの如きは、尙一八八一年卽ち我が明治十四年に於て、心理測定の果して可能なるや否やを疑ひ、之を公會に於て講演した程であつたから、フェヒナー、ヴント一派の學說の普及するに至つたのは其本國獨逸に於てすらも比較的最近の事に屬すると言はねばならぬ。然し、當時の我が學界に在つては、既に外國心理學の紹介盛に行はれ、實驗心理學、精神物理學、比較心理學、兒童心理學、民族心理學等が當時新心理學なる名稱の下に續々紹介され當時の青年學徒の心を惹いたことは事實である。恰も此時（明治二十一年）故元良勇次郎氏が米國ジョンス・ホプキンス大學より歸朝して大學に於て精神物理學の講義を開いた。當時青年學徒が氏の新講義を聽いて驚喜措く所を知らなかつたのは實に我が心理學界の一偉觀たるを失はざると同時に、我が國今日の心理學の發達を促がす一大動機を與へたものと言はねばならぬ。

爾來、心理學は多く機械を使用し、或は統計を調製し、以て數字上に明白な

らんことを期するに至り、實驗を主とせねばならぬことは最早心理學上動かすべからざる所となり、從つて、從來餘り知られなかつたヴントが最も重きを措かれ、我が國に於ける新心理學成就の功は殆どヴントに依つて爲されたやうな觀があつた。而して此間に於ける故元良博士の努力と感化とが今日に於ても尙ほ學界の美談として傳へられてゐるのは特に吾等の忘るべからざる所である。而してヴントと共に我が國に知られたものはヘフディングの心理學書である。斯くして我が心理學も一時は全く獨逸派に傾いた姿であつたが、其の後、エール大學のラッド氏は親しく我が國に來朝して講義を試みた丈けあつて、幾分かの影響を及ぼしたことは爭はれない。又ハーヴァード大學の故ジェームス教授に至つては、獨り我が心理學界にのみならず、廣く哲學界に其影響を與へたこと頗る大なるものがあり、かのプラグマティズム問題が我が哲學界を賑はした如きも實にジェームスの著に係かる『プラグマティズム』が最初の刺戟となつたのである。其他、彼の心理學書の一種は飜譯され、廣く讀まるゝ等、萬事一方のヴントと其勢威を爭ふの觀があつた。斯くして獨逸一點張の我が心理學界は亞米利加の心理學に依つて多大の影響を受け、今日に於ても其優劣の度俄に決すべからざるものがある。獨のエッビングハウス、米のティッチナー、故ミュンスターベルヒ、取り分け、スタンリー・ホールの如きは其著述の飜譯され、學界に少からざる影響を與へてゐる。尙、一方に佛國のリボー、ビネー、ジモン、ル・ボン等が夫々其專門の分科に於て我が國心理學界に紹介され、是れ又相應の貢獻を爲してゐることも事實である。

故元良氏は自ら獨創的の工夫と研究とを試みた人であるが、今日の我が心理學者は殆ど全く氏の門下に出でたものと言つて差支ない。氏は一方に教授すると同時に、明治三十二三年の頃、心理學會を起して研究と後進誘導とに心を注ぎ、心理學實驗場を設立し、幾多の著書を公にする等其功績誠に著大なるものがある。尙、東京の文科大學には數年前迄、故元良氏門下の福來友吉氏が在つて變態心理學、催眠心理學を講述してゐたが、明治四十三年より四十四年にかけて所謂千里眼問題が現はれ、其結果遂に氏の解職と

なつたのである。京都の文科大學にては、當初、松本亦太郎氏教授として、東京同樣、心理實驗場をも設置し、一方研究會をも起し、着々斯學研究の基礎を築きつゝあつたが、先年元良教授の逝去に遇ひ、東京に轉じ、同時に過般歐米留學より歸つた野上俊夫氏が助教授として氏の後を繼承してゐる。今日我が精神科學界に於て最も盛に研究され、且つ一般の興味の中心となつてゐるのは實に此心理學の方面である。從つて近來此方面の研究が大に進歩し、民間に在つても盛に研究され、早稲田大學の普通心理學教授金子馬治氏及び實驗心理學教授中島泰藏博士、東洋大學教授にして兒童心理學專攻の高島平三郎氏、慶應義塾大學教授川合貞一氏の如きは就中其尤なるものである。又、大學出身者を中心とする『心理研究』なる專門雜誌も現はれ、熱心なる研究は確に我が學界の一偉觀と言はねばならぬが、其研究を見るに大體から見て未だ外國に於ける研究の紹介以上に餘り出てゐないのは、我が一般精神科學界の趨勢上止むを得ないことである。然し、近時、純日本の心理研究に手を染めかけたのは我が心理學今後の發達に一轉機を與へるも

のと言つてよからうと思ふ。

倫理學 倫理學は前にも述べたウェーランドの倫理書に始まりホプキンス、ジャネー、ベーン、スペンサー、シヂウィック、ミューレッド、マッケンジー、グリーン、バウンゼン、ヴント、シリー、ラッド、ヒスロップ、デューイ等の著書が可成廣く行はれ、明治三十年代に於て最も盛に研究され、論議され、一時、倫理學の研究が學界を風靡するの觀があつた。東京大學に於ては夙に中島力造氏の擔任であり、京都大學に於ては初め狩野亨吉氏の擔任であつたが、今は前早稲田大學教授藤井健治郎氏之を擔當し、又高等師範學校にては東京の吉田靜致氏の努力を認めねばならぬ。其他、現早稲田大學の田中喜一氏も大に活躍したものである。而して又德育に關する協會も種々あり、故西村茂樹氏創立の日本弘道會の如きは既に明治九年より今日に及んでゐる。其他、學者を中心とし、依然として倫理學研究の中心となつてゐるものは丁酉倫理會である。丁酉倫理會は外國に於ける所謂倫理修養運動を爲さんとするものであり、明治三十二年に至つて、今日の名稱に改め、翌年より公開講演を開き、機關雜

誌を發行し、東洋大學の中島德藏氏之が編輯に從來し今日に及んでゐる。而して利己利他說の問題、自我實現說、日露戰後は殊に國民道德の研究等が我が倫理界を通じて從來研究された主要問題であつた。

教育學　教育學も倫理學と略、其發達の經路を同じくしてゐる。一時、我が學界は教育倫理の二學を以て持切りの時代があつた。最初我が國に入つた教育學は、英のスペンサー、ベーン及び米のジョホノットの書であつたが、明治十八年の頃前京都大學の教育學教授谷本富氏に依つて初めてヘルバルト派の教育學が我が國に傳へられてからは教育學界はヘルバルト一點張の姿となり而も今日尙依然として其影響の著大なるものあることは爭はれざる事實である。當時又一方獨のローゼンクランツの教育學も輸入され、佛のコンペーレ等の影響も認められたが、ヘルバルトの所謂科學的教育學は當時實に世を風靡したのである。斯くして我が教育學も亦全く獨逸本位となるに至つた。明治三十二、三年以來獨のナトルプ、ベルゲマン米のデューイ等の社會的教育學我が國に輸入され、就中ベルゲマンの影響は最も

大であつた。其後、明治四十年以後に至つて獨のライ及び故モイマンの實驗教育學が一時盛に我が國に傳へられた。此間エレン・ケー一流の所謂個人主義的教育思想も紹介され、最近、オイッケン哲學より生れた人格的教育學も紹介され、今尙、兎角の議論を見てゐるが、それと同時に依然として社會的教育學を提唱する學者もあり、渾沌として歸着する所を知らざる有樣である。或者は精緻なる實驗的研究に從事し、實驗心理學を以て其唯一の根據とするに反して、或者は哲學的に統一的に研究し行かんとしてゐる。而して、倫理學と同じく、今後大に其面目を一新し、研究の方法と組織の構成とを改造するの必要に迫られてゐるものは實に今日の教育學であると思ふ。今日、教育學の研究又は講義は各所に行はれ、教育雜誌、教育學會の數頗る多く、外觀上は兎に角、盛況を呈するもののやうに見えるが、事實は決してさうでない。東京大學にては初め獨人ハウスクネヒト、故日高眞實氏、野尻精一氏、大瀨甚太郎氏等此學を講じ、現在は吉田熊次氏專ら教授に從事し、京都大學にては初め谷本氏其教授であつたが、今は辭して小西重直氏之に任じて

ゐる。又澤柳政太郎氏は帝國教育會を率ゐて實際的研究の重鎭となつてゐる。

社會學 社會學はギゾー、バックルの文明史及びケーリーの經濟書に系統を引き、大學に於ては故外山氏初めて教授し、一時スペンサーの社會學最も盛に行はれ、有賀長雄氏之を應用して『社會進化論』を著はしたことがある。明治二十年頃よりウァードの社會學が參考に用ひられ、後、グンプロウィッツが重んぜられそれよりコロンビア大學教授ギッディングスの社會學大に行はれ、何れも其飜譯が現はれた。斯學の鼻祖、佛のコントが今尙我が學界に重きを爲してゐることは事實であるが、一般には讀まれない。寧ろ主として米國社會學者の著書の方が一般に廣く讀まれてゐる。尙、最近、殊に社會心理學の研究が米國に盛に行はれた結果、ロッスの如き最も廣く我が國に紹介された。其他、ヴントの民族心理學、ル・ボンの民族心理學、群衆心理學等も紹介された（是れは既に心理學の部にて說いた）。而して東京大學に於ては建部遯吾氏社會學教授に任じ、自ら西洋の學者に一機軸を拔ぜんと努力してゐる。京都大學に於

ては同志社大學の米田庄太郎氏講師として斯學を講じてゐるが、氏は寧ろ民族心理學の造詣頗る深く其方面に於て一新生面を開かんとしてゐる。其他、早稻田大學には浮田和民氏、遠藤隆吉氏等あり、何れも相當に學界に重ぜられてゐる。

宗教學 宗教學に就いては南條、笠原二氏が梵語をマクスミュラーに學び、又其助力者となり、當時マクスミュラーの書は一部の人に精讀されてゐたが、今は大學に一科として置かれ、姉崎正治氏は東京大學に教授として斯學を講じ、佛教と基督教との間に契合點あるを認め盛に研究してゐる。マクスミュラー文庫が東京大學の圖書館に設けられたのは言語學に利益あると同時に宗教學の研究にも多大の便益があるであらう。京都大學に於ては、松本文三郎氏印度哲學（東京大學にては高楠順次郎氏）を擔任し、榊順三郎氏梵語を受持ち、宗教は石橋助教授の擔當に屬してゐる。其他、加藤玄智氏は東京大學に講師となつてゐる。

美學 美學は維氏の美學、ハルトマン『審美綱領』等の書は、森林太郎氏に依

つて紹介され、森氏は我が國に外國美學を傳へた最初の恩人である。其後、故高山林次郎氏は斯學を專攻し、其著書も現はれ、廣く讀まれた。現に東京大學に於ては大塚保治氏其講座を擔當し、京都大學に於ては深田康筰氏數年前より教授として斯學を講じてゐる。尙又、民間に在つては、早稻田大學の島村瀧太郎氏斯學の研鑽深く、夙に一雙眼を備へてゐたが、今は全く學界を離れてゐる。氏の『新美辭學』は必ずしも美學の專門書と目することは出來ないが、夙に廣く讀まれたものであることを特記して置く。

以上明治の哲學及び精神科學の一般を叙述したのであるが、尙我が國民の哲學思想を開發し、偉大なる感化を青年思想家に與へた者が專門學者以外にある。それはカーライル及びエマーソンである。就中エマーソンの影響は最も著しい。而して此二人者は殆ど我が國に於ては外國語の古典ともいふべき地位に上つてゐる。從つて此二人者の著書は殆ど全部飜譯され、中には飜譯數種あるものもあり、今日尙依然として讀書界に愛讀されてゐる。其他、專門學者ではあるが學問界に於けるよりも一層多く一般人

に飜讀されたやうに思はるゝ者は獨逸のヘッケルの著書である。而して彼の主著は殆ど全く邦語に譯されてゐる。尙ニーチェ、イブセン、トルストイ等の思想的感化も決して見遁がすべからざるものであらう。此等一般思想の影響に就いては既に本篇第一章に詳述したから、今一々之を贅するの必要はない。

尙、此處に看過すべからざる一事は、近時、東洋哲學の研究の勃興したことである。從つて儒教、佛教、神道等の新研究が續々試みられてゐるのは極めて自然のことと言はねばならぬ。殊に佛教思想の如きは、從來哲學學徒の本宗とせる獨逸哲學に似て、更にそれよりも深邃なる所あることが漸く我が學界一般に理解され來つた。此點に於て、哲學思想は再び東洋に復歸したなどと今更ながら物知顏の人達から言ひ囃されてゐるのである。嘗て今の子爵渡邊國武氏が西洋哲學を以て總て禪の中に具つてゐると爲し、臨濟錄に『有時奪人、不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪』といふ語を引いて西洋哲學の批評を試みたことがあるが、必ずしも之を以て牽

強附會とのみ言ひ去ることは出來ない。唯、東洋思想に缺くる點は一般に科學的研究の不足不進歩に在るのであるから、將來、此點に於て大なる進歩を遂ぐるに至らば、我が哲學の進歩は、蓋し偉大なるものがあるであらう。殊に、精神科學の進歩は直接間接哲學の進歩に影響すること一層多大なるものあることは言ふまでもない。故に、從來、數學、醫學、理科等の諸學科に於て何れも非常の進歩を遂げた名譽ある本邦科學者の將來大に努力しなければならぬ方面は、實に此精神科學界であると言はねばならぬ。

第六章　學問獨立の時代

以上、吾等は明治末年に至るまで約三千年間の我が國科學發達の概況を記述し、進んで大正五箇年半の間に於ける最近の狀態を報道するの必要に迫られてゐるが、之が詳述は素より本書の能くする所ではなく、又之が發達經路を辿ることは今日の場合決して容易の業ではない。そこで、茲には簡單に最近我が科學界の一般傾向を述べ、延いて今後の豫測乃至希望を一言して置くに止めたいと思ふ。

現在の我が科學研究の趨勢を大觀するに、次の二箇の意味に於て之を獨立時代の科學と稱することが出來る。即ち、一は、從來主として我が科學研究の本宗と篤し、其指導と幇助とを仰いだ西洋先進國の科學研究より獨立すること、他の一は、實地の技術者の掌握し來たつた科學から獨立して、純然たる科學者の研究に一任すること是れである。換言すれば、前者は外國科學界よりの獨立であり、後者は我が技術者よりの獨立を指すに外ならない。

殊に、今次の歐洲大戰は、交戰諸文明國の科學的優劣を事實に立證したのみならず、我が科學界の獨立的研究を喚起したことは爭はれざる事實である。明治時代の我が科學發達を見るに、勿論、其後半期に於て、漸次我が科學者獨得の研究も現はれ、中には、世界の科學界に誇るべき發見乃至發明の輩出したことは前篇所說の通りであるが、其他に就いて言へば、概して西洋先進國の研究の結果を基礎として、僅に其上に一二歩乃至數歩の小研究を加へたに過ぎなかつた。未だ、之を以て自覺的に、將た積極的に新開拓したる獨創獨立の大研究とは認められない。此意味に於て、明治の科學界は之を概觀して先づ西洋先進國を其本宗と目し、研究の指導及び幇助を彼に仰いだものと言つても敢て失當の言ではなからうと思ふ。

勿論、此間例へば我が科學界中最も其進歩の著しきものと稱せられる醫學の方面に於て、或は大正四年(一九一五年)に、現九州帝國大學醫科大學教授たる醫學博士稻田龍吉氏がかのウイルス氏病の病原體を發見し、又、翌大正五年、醫學博士二木謙三氏及び同じく醫學博士石原喜久太郎氏の協同研究

に依つて、鼠咬病の病原體が發見された等、世界の學界に非常の大貢獻を與へた新研究が試みられたことは事實である。其他、獨逸のエールリッヒ氏を助けて氏と協同にかの有名なる六百六號、卽ちサルバサンを發見した醫學博士泰佐八郎氏、扨ては過般惡蟲の病原を發見立證せる現北里研究所の宮島幹之助博士等の如き功勞者あり、又世界に誇るべき獨自の新研究を我が無線電信及び無線電話に試み、殊に無線電話に於ては世界第一と誇稱される工學博士鳥潟右一氏等の大研究者もあり、各方面の科學者にして或は學士院より表彰され、御手許金等の下賜を受けた者が必ずしも少數ではなかつた。尤も、鳥潟博士の無線電話に於ける新發見は所謂T・Y・K式なるものであつて、實は明治四十五年二月のことに屬してゐるが、其恩賞に預かつたのは、大正三年三月のことであつて、當時の御沙汰書には、『新に一種の振動放電間隙を發明し、無線電話裝置を完成す』云々と記されてゐる。實に我が無線電話の研究が斯く世界第一の進歩を遂げたのは主として同博士の努力發明に因ると言つて差支ない。我が電信事業研究の先鞭を着けた一人た

る現東京帝國大學工科大學教授工學博士淺野應助氏は、鳥潟博士の功績偉大なる所以を述べて、『殊に博士の無線電話が伊勢灣に活用せられつゝあるが如きは、實に世界に於ける無線電話實用の嚆矢なるに至つては豈に氏の功績偉大なりと云はざるを得んや』と言うてゐる。

因に、T・Y・K式無線電話裝置とは、我が遞信省の鳥潟博士、横山技師、及び北村技手の三人が前後六年の間研究した結果新に發明したもので、前記三人者の姓の羅馬字綴の頭文字を取つて斯く命名したものである。

斯く、醫學、工學等の如き殊に應用科學の研究に於ては、最近の我が學界が非常の進歩を遂げたことは疑ふべからざる事實であるが、今次の歐洲大戰亂の影響に依つて特に化學工業の方面に、目下乃至今後一層數層の大奮發を爲し、優に外國のそれと獨立獨歩するの地位に到達し得べき覺悟と施設とを要するの急務を痛切に自覺せざるを得ざるに至つた。實に科學研究の興廢は一國の興亡消長に關し、國民の死活問題たることは、獨り我が國に於てのみならず、今次の交戰各國に就いても明かに證據立てられた儼然た

る一大事實である。今次の大戰亂も最初の中は、單なる兵力問題であつたが、漸くにして、食糧彈藥等の軍需品の問題に移り、更に其供給補充策を講ずるの結果、遂に歸着する所は一に科學的研究の優劣問題たるに終つた。是れ夙に識者が今次の戰爭を以て、科學の戰爭と稱したる所以である。

以上は我が國今後の科學界が、從來主として、其本宗と仰いだ西洋先進國の科學界より獨立して、我が科學者の獨創的新研究を必要とする所以を略述したのであるが、前にも述べた如く、今後の我が科學界が尙獨立を必要とする所の一方面あることを看過してはならない。而して現時我が學界乃至一般社會が寧ろ此方面の獨立を閑却してゐるかの觀がないでもない。故に特に之を論ずる必要があると思ふ。

現代文明が、殊に近世に發達した科學に依つて今日の如き著しき進歩を呈したことは何人も之を否むべからざる事實である。故に現代文明を語る者は、寸時も科學の貢獻を看過若しくは輕視することが出來ない。科學を離れて、現代文明の進歩なしと言つても、さしたる過言ではなからう。是

れ何れの文明國に在つても共通の事實である。故に、文明諸國に在つては、如何なる事業と雖、其先驅を爲す者は實に科學者であつたし、又、現にさうである。換言すれば、科學的新研究が先づ出來上がり、然る後に、政府と國民とが、其研究に據り、又其研究に指導されて、當該事業に着手するを常として來たし、又、現にさうであることは爭はれない。政府及び一般國民は其國の科學者の新研究に則つて國家を富ませ、國民生活を向上せしめ、國民の能率を增進し、兵を强うせんとするのである。故に、歐米先進國に在つては、學理と實際とは誠に其間髮を容れざるほどの濃密なる關係がある。從つて、科學者の尊重されることは、決して我が國の事情と同日に談ずべからざるものがある。

由來我が國に於ては、形而上の學問が、古來、有名なる學者の輩出に依つて比較的大なる發達を遂げたにも拘はらず、形而下の學問、卽ち、科學の發達は頗る遲々として振はなかつたことは何人も承認する所である。勿論、明治維新に至つて、大に科學の研究に着眼し、之を奬勵した者決して少くなかつ

たが、是等は單に我が國民を警醒せしめんとしたに止まつたものであつて、今日より當時の狀態を追想するに、未だ之を以て我が國民が秩序的なる科學的研究の道程に上つたものとは認め得られない。我が國民が、兎も角も、初めて科學的研究、若しくは科學の應用に着手したのは、明治以後、取り分け其後半期に於てゞあることは爭ふべからざる事實である。而も、其科學的研究、若しくは科學の應用に在つても、我が國の科學界は概ね科學者あつて、それを指導したのではなかつた。寧ろ必要に迫られて、下より入り來たり、漸次上に向つて進み來つたものであつた。此一事は我が明治時代の科學發達を顧みる者の決して看過すべからざる點であると思ふ。

更に之を換言すれば、明治時代の科學的發達は、其初めは極めて少數の技術者の手より、技術の上に輸入されたものであつて、學理としての科學は、之より遙かに後れたものと見て差支ない。例へば、紡績業の如きは初め、素人なる資本家と職工とが相集まり、外國の技師を師匠として工場を起したものである。其他、製紙業、製帽業の如きも皆等しく、其需要を感じては、夫々の

製造會社、若しくは工場等を設立するといふ有樣であつた。即ち、總て必要に迫られては、先づ技術不完全なる職工の手に輸入して其事業を起したのであつて、之に關する學理の研究は常に其後塵を拜し、それに追從し來つた如き傾向である。故に、之を他面より見る時は、實に明治時代の科學、殊に明治前期の我が科學は、科學者の手に依つて研究されたものとは言ひ得ざる狀態に在つた。而して科學研究の全權を掌握してゐた者は、實際は實地の技術者であつたのである。更に切言すれば、科學者は未だ科學研究の完全なる自由を得ることが出來なかつた、即ち、科學者の獨立といふことは未だ確然たる保障を與へられなかつたのである。科學發達の案外遲々として不振の狀態を呈したことは毫も怪しむに足らない。

從つて當時に在つては我が製造會社、若しくは工場と本邦科學者との間には、何等の聯絡もなく、其關係頗る疎遠なるものがあつたことは必然の勢と言はねばならぬ。而して一般に學理の應用は實際と頗る懸け離れたものの如くに考へられてゐたし、且つ、又實際上然かあつたのである。然るに、

明治も漸次其年代を經過するに從つて、一般教育の進歩すると共に、科學の教育も大に勃興し來たり、學校出身者の間より、幾多の技術者乃至研究家を輩出するに至り、學問と實際との關係に關する從來一般の誤解も漸次氷解し、我が科學界及び工業界は、歩一歩其舊態を改むるに至つた。然し、明治の後半期を終るまでは未だ、我が國の科學的研究が、全く科學者の手に移り、科學者が初めて自由と獨立とを獲得するに至つたものとは認め難かつたのである。

然るに、今次の歐洲大戰亂に際會して、我が朝野の識者は、俄然として覺醒した。我が國民は、技術の輸入や、他人の研究の輸入のみにては到底自國の獨立を完全に維持するに足らざることを痛切に自覺するに至つた。此點に就いては前段既に述べた所である。兎に角、其結果として大に教育及び學術の奬勵に努むると同時に、一方に於て、根本的研究に從事すべき學者奬勵の趣旨を以て、過般新に理化學研究所の設立を見、我が國新數學乃至新數物學の開拓に甚大なる功績あつた現樞密顧問官理學博士菊池男爵を其所

長に、又、我が國新化學の勃興に與つて大に力あつた現東京帝國大學理科大學長理學博士櫻井錠二氏を其副所長に任命されたのは我が科學界に於ける獨創的研究開拓上の新記錄と認めなければならない。尙其他にも個人經營の研究所も決して少くなく、何れも科學者の獨立的研究を待たんとする傾向があるのは誠に喜ばしき現象である。而も是れ實に科學の研究が初めて學者の手に移らんとする傾向を示したものであるから、我が國に於て眞に權威ある科學的研究は實に今日以後に勃興するであらう。吾等は此多望なる好機會に臨んで、私に我が科學界の前途を祝福するの念を禁じ得ざる者である。由來、我が國に在つては學者と一般人との間は兎角相互の同情と理解とに缺けてゐた憾がある。前にも言つた如く、科學の研究は、科學者自ら其指導者として進まねばならぬが、之と同時に、一般民衆に、科學者を尊重し、其研究に敬意を表する丈けの好意と研究的興味と研究的準備とがなくては到底科學者の研究を大成せしめ、又之を實用化することは出來ない。我が國の科學者は歐米先進國の科學者と其知識殆ど同程度に在

りながら、我と彼と文明の間に尙未だ頗る大なる軒輊あるのは、畢竟一般國民に科學の興味と知識と科學者及び科學に對する尊敬心とが缺けてゐるからである。此意味に於て、吾等は今後益、科學的知識の普及を計らねばならぬ。而して我が科學者に對しては特に此民衆教化の重大意義を自覺せんことを切望に堪へない。科學者に此覺悟あり、一般民衆に此用意ありとせば、今後我が科學界の進步發達は蓋し大に刮目して待つべきものがあらうと思ふ。幸に此小著が、我が讀書界に對して此種の自覺と希望とを喚起することを得ば、獨り本會の喜びたるのみではあるまい。

日本の科學界 終

大日本文明協會刊行書
日本の科學界

大正六年五月十七日印刷
大正六年五月二十日發行

編輯兼發行者　大日本文明協會
右代表者　市島謙吉
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地

著作權有
非賣品

發行所　東京市麹町區元園町一丁目二十二番地
大日本文明協會事務所
電話番町一〇一五、三五四二番
振替口座東京二一八九〇番

編輯顧問（イロハ順）

文學博士 井上哲次郎
文學博士 内田銀藏
理學博士 石川千代松
工學博士 眞野文二
同志社長 原田助
醫學博士 青山胤通
法學博士 農學博士 新渡戸稻造
醫學博士 荒木寅三郎
法學博士 和田垣謙三
法學博士 天野爲之
前大阪高等商業學校長 加藤彰廉
工學博士 淺野應輔
慶應大學教授 川合貞一
工學博士 阪田貞一
東京高等師範校長 嘉納治五郎
法學博士 佐野善作
慶應義塾長 鎌田榮吉
文學博士 三宅雄二郎
理學博士 横山又次郎
法學博士 高田早苗
早稲田大學教授 志賀重昂
法學博士 鹽澤昌貞
文學博士 坪内雄藏
法學博士 關一
文學博士 上田萬年

會長

侯爵 大隈重信

編輯長

法學博士 浮田和民

理事長

市島謙吉

理事

大鳥居弃三
並木覺太郎
杉山重義

主事

森脇美樹

大正六年度刊行豫定書目

一月 刊行 獨國ウエー・ゾンバルト氏原著（纂譯）
資本主義の精髓 全

二月 刊行 露國アー・ヒツピウス氏原著（全譯）
兒童生活と其教養 全

三月 刊行 英國ヘンリー・ド・アルセーユ氏原著（抄譯）
暗黑面の獨逸 全

四月 刊行 米國エー・ホルムス氏原著（抄譯）
人格養成論 全

五月 刊行 大日本文明協會編纂
日本の科學界 全

六月 刊行 佛國ル・ボン博士原著
歐洲大戰の心理的教訓 全

七月 刊行 英國イー・シー・センプル女史原著（纂譯）
地的環境と人生 全

八月 刊行 英國オリヴァー・ロッヂ氏原著（全譯）
心靈生活 全

九月 刊行 英國ジェー・エフ・ホブソン氏原著（纂譯）
產業組織論 全

十月 刊行 米國エー・ヂー・ケラー氏原著（全譯）
社會進化論 全

十一月 刊行 大日本文明協會編纂
民衆藝術 全

十二月 刊行 米國ジー・エッチ・ロツクウッド氏原著（全譯）
富の研究

注意　前年度發表のものと多少變更仕候間御諒承願上候

次卷豫告

第十八卷

歐洲大戰の心理的教訓

佛國 ル・ボン博士原著

（六月刊行）

歐洲大戰が個人に將た社會に與ふる影響の大なるは言を俟たず而も普通世人の觀察は概ね物質的方面のみに偏し吾人の精神作用及び思想上に關するものは未だ頗る寥々たり。著者は有名なる社會心理學者なれば其觀察に映じたる記錄は必ずや吾人の參考すべきものあるを疑はず。

目要

本書の解釋に要する心理的原則—戰爭の心理的研究—感情、個性、神祕の力—個性の變化—**近代獨逸の進步**—獨逸の建國及發展—獨逸哲學—軍國主義—經濟的進步—獨逸人氣質—**戰爭の遠因**—政治的及經濟的原因—敵愾心—獨逸の壓迫—覇權掌握—**戰爭の近因**—最後通牒と外交談判—英國の態度及感情—三皇帝の意志—**戰爭に於ける心理的勢力**—戰術の變遷—勇氣—心理的誤算—**獨逸戰爭の心理的要素**—戰術の心理的基礎—中立國の感情—未知の戰爭—近代戰爭の直接結果—不確實なる戰爭記事—講和問題等

356
31/4

6

終